
報道と自由

子鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

報道と自由

【Nコード】

N9743B

【作者名】

子鉄

【あらすじ】

社会にニュースを届けるアンカーマンとある作家を追ったドキュメントです。これは我々一人一人が考えるべき問題なのです。

2001年3月25日、ある記事が各新聞の一面を賑わせた。

東京都杉並区に現われた怪人21面相捕まる。

調べによると、昨年5月頃より発生していた一連の怪事件の犯人が警察の懸命の捜査により捕まったという。

直、男は犯行を全面否認しており、事件の全容はまだ見えてない。

日々新聞やニュースで報道される殺人や強盗、紛争など暗い話題は一日たりとも休むことを知らない。

インターネットなどのマスメディアが発達し、ページを開けばやるせなくなる話題や事件が数時間ごとに更新される。

明るいニュースだけしかない新聞が発行される日はやってくるのだろうか。

来ると願いたい。

当時の私は新聞関係の仕事をしていた。

ジャーナリズムと言うものは社会の奥底に鋭く入って行かなければならないもので、私はその最前線において特攻隊のような役割を担っていた。

報道の仕事というのは皆様が考えるより何倍も過酷なものではないだろうか。

過酷な一日はまず午前二時に起きるところから始まった。

眠い目を擦りながら洗面所に行き、顔を洗い歯を磨くと、ポマードをべつちより頭に撫で付け、余った分で眉毛を整える。

それが終わるとどんぶりに飯をよそい、卵と味噌汁をぶっかけ、一気にかきこむ。

それから、真新しいワイシャツにネクタイ、左胸にアザラシのワッペンを付け、家を後にした。

ニコニコ新聞販売所に着くと皆にあいさつをし、広告を一枚一枚丁寧に新聞に折り込んだ。

その際、つまらない広告や不要な割引券は自分の判断でごみ箱にぶん投げた。

一人の人間として社会の為にできることはする。

それが我々に科せられた使命だ。

新聞には様々な記事が載っている。

事件、スポーツ、今日の困ったさんなど、色んな話題が連日紙面を賑わせた。

そういつた笑いや感動を各家庭に届けるのが私と困ったさんの仕事であった。

私が担当していたのはB地区で、無知な素人の方には分からないだろうが我々の業界では担当エリアをABCとアルファベットで分けていた。

この際、素人みたいなもんには黙っててもらいたい。

あ？

やっただんど？

失礼、話を続けよう。

地区はAからFまで分けられており、私の担当していたB地区は近年寄りが多い地区だった。

ちなみにA地区は女子大のすぐ近くということもあり、素敵なお嬢様が沢山いる我々にとつての聖地であった。

そのA地区はリーダーの吉武さんが担当しており、とても楽しそうに仕事をしていた。

吉武さんはこの道一筋二十年のベテランで、こないだも配達時間58分という大記録を作った皆の憧れの存在である。

なにも知らない私に一から仕事を教えてくれたのもこの方で、ご飯をご馳走になったり、遊びに連れていってもらったり、公私ともにとてもお世話になった。

先輩後輩といった関係を超越した、なにか兄弟のような関係であった。

吉武さんのおかげもあり、着実に力を付けた私はすぐに頭角を表した。

F、E、D、C、Bと上がってきた私は次はA地区になるはずであった。

あいつさえいなければ。

いつしか心のなかでは吉武と呼び捨てにしていた。

私はいつもA地区を通ってB地区に行っていた。

吉武さんの技術を盗むためである。

盗むのは財布だけではなかったのだ。

遠くから彼の配達する様を見ていると、ふと目が合い笑顔で手を振ってくれたので会釈をした。

その後地面にツバを吐きその場を去った。

「やっぱあの技術は凄まじいな。調子に乗りやがって。もてようと必死か？あいつ」

このままではだめだ。

あまりの実力差に愕然とした私は自分の非力さを再認識させられた。

それからは彼との差を縮める事に何よりも専念した。

自宅に帰ると、早速作戦を練った。

まず、数百万個の【呪】と言う字だけを使い、彼の似顔絵を作った。

さらに、それを熊のぬいぐるみに貼りつけ、何度もビンタをした。

多少気分は晴れたがまだ十分ではなかった。

「このままではだめなんだ。このままでは……………」

次の日からは地獄の始まりだった。

腕立て、腹筋にジョギングをし、体を鍛えた。

毎日水風呂に入ったり、背中にろうそくを垂らしたりもした。

バイクもチューンアップし、750CC

に変えた。

パフパフ鳴るやつも付けた。

更に、主にお年寄りの家を順路表からピックアップし、配達するのを三日に一度にした。

中にはクレームの電話をかけてくる人もいたが、そういう人の家のポストには

【滅】と書いた紙を貼ってやった。

するとどうであろう、私のタイムは日に日に縮まっていった。

ある種の達成感のようなものがあつたが、それでも区間新記録には達していなかった。

それからは筋トレの回数とろうそくの量を増やし、自分が受け持つおよそ半分の家のポストに自家製【滅】シールを貼った。

さらに、軽量化をはかる為に余分な記事を省いた。

一番重要なTV欄とマダム房江の今日のコラムのコーナーを残し、あとは捨てた。

すると自分でも驚くほど軽くなり、コンパクトになった。

半年が過ぎる頃、私は彼の記録を二分更新する事に成功したのである。

「やった！ついにやったんだ」

今までこんなに必死になった事はあつただろうか。

勉強も運動も仕事も適当だった。何に対しても無関心だった。

電車では無関心を装いながら女の子をちらちら見た。

気付かない振りをして女性専用車両に乗ったこともあった。

一張羅を着て女子大の前を何度も行ったり来たりして、声をかけられるのを待続けた日もあった。

そんな薄暗い青春時代を過ごした。

しかし今私は清々しさと満ち足りた気持ちで一杯だった。

明日からはいよいよA地区だ。

高鳴る胸はうれしさではずんでいた。

生まれてこの方こんなに爽やかで気持ちのよい日はあったであろうか。

次の日、景気付けに一杯呑み、ムチで自分の尻を叩いた。

そして、この日の為に買っておいたおニユーのタキシードを着てスニーカーを履いた私は、勢い良くドアをぶち破り外へ出た。

750CCに乗り爆音を轟かせると、パフパフ鳴らしながら職場へと向かった。

うおーっ、天下とつたるでー！

冷たい風を一身に浴び、気分は最高潮であった。

職場に着くとなにやら騒然としていた。

みんなも伝説の幕開けに気付いているようであった。

「やあ、しょうもない諸君どうもご苦労さん。ああ、吉武くん、ちよつと。」

私の公式記録書いてきたから、二百部コピーしてA地区全域に貼つていってくれ。

あとこれ、君が次に受け持つB地区の地図ね。がんばってな」

私は下の者にも精一杯気を配った。

駄目なりにがんばる部下たちへの心のエールである。

ふと、部屋の隅に目をやると、椅子にスーツを着た50才位の恐面の男が座っていた。

男は交尾前の野良犬のような鋭い目をしていた。

「あれ？君は新人の子？」

「いえ、あなたにお聞きしたいことがありましてね」

「あー、取材の方ね。おい、吉武君、ちんちに冷えたおビールお出しして」

「いや、そういった用事ではないんですよ」

そう言う男は名刺を一枚差し出した。

『地域安全保安課巡査長』そう書かれてあった。

「えっ、刑事さん？なっ、なんですか？」

「自分で分かるな？」

「分かりませんよっ！」

刑事はため息をつくと話をはじめた。

「まず、このシール……」

私が端正を込めて作った

【滅】シールだ。

その他には、【警告】【アウト】【今年から新聞は法律により三日に一度になりました】シールなどがあつた。

家にはこれからA地区で配る予定であつた、【LOVE】【夕方またきます】【君の彼氏浮気してたよ】シールなどがあつた。

このシールが君の配達している区域に貼られていたんだけど、見覚えあるよな？

「いえ、ちよつと分らないです。はい」

刑事の目が更に鋭く光つた。

私は自分の動揺と緊張を悟られまいと、股間をぎゅっと握つた。

「ではあの違法バイクは？」

「あれは田中くんのやつじゃなかったかな。おいつ、至急本社に確認してくれっ」

「いや、君が今乗ってたよな？それにお酒を呑んでるんじゃないのか」

「いえ、顔が赤いのは生れつきです。発砲酒ではありません。もう帰ってください。

部下が見てるじゃないですかっ！帰れ、帰れーっ！」

「まあ、詳しい話は署で聞こうか」

そう言われると私は平手打ちをくらい、車に詰め込まれた。

あつ、一応決まりごとなんで、何か危険なもの持っていないか調べさせてもらうよ。

はい、失礼。

ん？

あれ？この胸に付けてるの何なのかな？

あつ、いや、防弾チョッキです。

ちよつと失礼するよ。

あら？このブラジャーは何かな？

また罪が増えたようだな。

最近この近所で多発している下着泥棒の容疑もかけられた。もちろん私だ。

その後私は迷惑防止法令違反、器物破損、違法改造、下着泥棒、ストーカー行為その他15の罪で起訴された。

私はそのすべての罪を否認し、40日間拘留される事になった。

留置場の生活はとても悲惨で、筆舌しがたいものだった。

やったのはお前だな？

やつ、やってません。

お前の家から大量の女性の下着が出てきたんだが？

しっ、しっ、知りません。

ではあの改造バイクはお前のだよな？

わっ、わかつ、わかりません。

電車での連続痴漢事件も君だな？

それは違います。

それだけは本当です。

毎日の取り調べは極めて厳しく、朝から晩まで自白を強要された。
9：00から17：00まで続いた。

12：00から1：00まではみんなドッチボールなどをした。

食事もひどいもので、大好きなハンバーグは週一回しか出なかった。

しまいには次から次へ違う刑事がやってき

ては、私をいやらしい目で見るのである。

私は起訴され、懲役10年を求刑された。

当然無実を主張し、裁判は双方の論点が激しくぶつかり荒れに荒れた。

結局裁判は最高裁までもつれたが、裁判官が出した答えは無罪だった。
疑わしきは罰せず。

それが司法の出した最終結論だ。
ふざけた話である。

裁判という狭い箱の中で人が人を裁くなどということが許されるのでしょうか？

許される筈などないのである。

私は今回のことでとても成長した。

人が裁判を創るのではない、裁判が人を創るのである。

民主主義というものはすべての者に対して平等だ。

平等っていい感じだね。

私は事件後、裁判官に宛てて手紙を書いた。

拝啓

その節はお世話になりました。

私は今、先生のおかげもありこちらで楽しくやっております。

無罪って本当にいいもんですね。

部屋中に習字で無罪と書いた紙を貼っています。

追伸

お宅の変な髪型の奥さんがこないだ浮気しました。

私はほっと溜息をつくと手紙を閉じた。

窓から外を眺めると、陽の光をいっぱい浴びて子供たちが元気に走り回っていた。

春の暖かい日ざしはみんなに平等に光っていた。

2007年5月5日

怪人21面相無罪確定。

昨年八月から起こっていた一連の事件は容疑者の無罪という形で幕を閉じた。

一部週刊誌で報道された、元容疑者Aさんから裁判長に宛てられた手紙について田中裁判長は「やつぱりかつ！」と一言残し去って行ったという。

なお、手紙の内容については明らかにっていない。

我々が日々目を通す記事は真実だけなのでしょうか？真実というのは何なのでしょう？

幸せってなんですか？

誰にも分かりません。

あなたにも私にもわからないんです。

じゃあ黙っててもらえますか。

バカッ！

失礼、話を続けよう。

我々は新聞というものをよく選んで読まないといけないのであり、一人一人が書かれている事をよく考え、行動することが重要なのだ。それはとても大事なことでとても尊いのである。

そういった意味では新聞など読まなくていいのではないのでしょうか？

正直面倒臭いですよね、うん。

世の中には字を読めない人もいるんだわ。

馬鹿にするのもいい加減にして欲しいわ。ほんまに。

結局みな新聞に踊らされていたのである。

2022年4月1日

新聞はその長い歴史を終えた。

IT技術の発達により総てをコンピューターグラフィックで賄える時代が来たのである。

新聞が無くなった以上、新聞配達と言うものも無くなり、吉武さんが造った配達記録世界一というのもすっかり埃をかぶってしまった。いた。

配達をする必要が無くなってしまった為、我々はやる事がなくなってしまった。

配達だけではない。

今では何でもロボットがやってくれる時代であり、つまらない仕事などはすべてマイロボットがやってくれるのだ。

先月はマイロボットMAX777が月給23万円も稼いでくれた。

工場でパンにジャムを塗っているらしい。

あの頃を思い出すとても懐かしい。

色々馬鹿な事もやってしまったが、今では犯罪もロボットがやってくれるのだ。

欲しい物があればデータをインプットすればいいだけだし、もし捕まったらロボの顔に熱湯をぶっかけ、首を木から吊し、死刑にしたいと言えばそれで済む。

なんとも味気ない時代である。

ただ、つらい時、悲しい時、逆にうれしくて心弾む時、誰もいない家で一人MAX777は待っていてくれる。

帰宅すると左右に首をぐいぐい振り、ウィンウィン言いながら出迎

えてくれる。

ありがたい。

本当にありがたい。

今日は早く帰ろう。

MAXが待っている。

あなたはこの作品を読んでどう感じましたか？

はたしてロボットと人間が共存共栄することなどありえるのでしょうか？

それは分かりません。

誰にも分からないのです。あなた分かりますか？

分かりませんよね？

じゃあ黙っていて下さい。

失礼、結局私達とロボットと言うのは兄弟なんですよ。

兄弟達と手を取り合い、自然を大事にし、両親や友達に感謝する。

だっていつでも自分は思いやられているのですから。

ただ、この場をお借りして読者の皆様に謝りたいことがあります。

驚かずに聞いてください。私はかつて数々の文学賞を受賞し、今では大成功を収めています。

しかし、その作品の全てはロボットが書いた物なのです。

週間セブンの八月号で報じられたように、私には大先生様と呼ばれているような実力も能力も無いのです。

工場でパンにジャムを塗っているのは私の方であり、特技は目隠しをしてパンの中身を当てるという、たったそれだけのつまらない人間なのです。

ファンの皆様申し訳ありませんでした。

こんな私が3年前の抱かれない作家第15位に選んでいただいたり、皆様に愛しの先生様と呼ばれたりするのが心苦しいのです。

実は、たった今もMAX777が狂ったように作品を書き続けているのです。

首をぐいぐい左右に振り、泡を吹きながら書き続けています。

大変申し訳ありませんでした。

ただ、これだけは信じて下さい。

スター扱いされて本当にうれしかった。

気持ち良かった。

たまらんかった。

それだけは信じて下さい。

ありがとうございます。

さようならさようなら。

編集者あとがき

次週より、緑川左京先生の

「遠き街にて咲いたチューリップ」の連載が始まります。

なお抗議の手紙、電話などは当社ではなく、本人に送って下さい。

こっちもいい迷惑なんです。

さようなら。

本当にさようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9743b/>

報道と自由

2010年12月21日03時05分発行